

遷延性意識障害患者の意識回復への関わり

持田ちひろ¹⁾ 丸山彩実¹⁾ 市村柚子¹⁾ 村上恵¹⁾ 藤内益美¹⁾

平野和子¹⁾ 中川康江²⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 2 病棟

2) 鳥取看護大学看護学部看護学科

Promoting consciousness recovery in patients in a persistent vegetative state

Chihiro Mochida¹⁾ Ayami Maruyama¹⁾ Yuzuko Ichimura¹⁾ Megumi Murakami¹⁾ Masumi Tohnai¹⁾

Kazuko Hirano¹⁾ Yasue Nakagawa²⁾

1) The 2nd Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Department of Nursing, School of Nursing, Tottori College of Nursing

要旨

当病棟では、2018 年度に、遷延性意識障害患者に対し、嗜好に合った刺激を外部から与えることで、感情反応の表出がどの程度向上するのかを明らかにする研究を行った。その結果、音楽鑑賞が感情表出を引き出す援助として有効であり、音楽鑑賞中に声かけを行い、手足を他動的に動かし関わったことで、感情表出を引き出すことができた。本研究では、2018 年度の課題であった「看護ケアの不統一による信頼性の欠如」を補うため、事例数を増やし、音楽鑑賞と看護ケアの統一を通して、音楽鑑賞による患者の感情表出の変化を検証した。その結果、患者の意識回復に変化が認められたため報告する。鳥取臨床科学 12(2), 74-78, 2020

Abstract

During the 2018 academic year, we conducted a study in this ward to clarify to what extent expression of emotional response is improved by externally applying a stimulus suited to the individual preferences of patients in a persistent vegetative state. Our results indicated that listening to music was effective as an aid to elicit emotional expression, and that it was also possible to elicit emotional expression by speaking to the patient and moving their limbs while they were listening to music. In the present study, in order to make up for the "lack of reliability due to inconsistency in nursing care for patients in a persistent vegetative state while they were listening to music", which was found to be an issue in the 2018 academic year, we increased the sample size and utilized a consistent approach of listening to music and nursing care, to investigate changes in the emotional expression of patients brought about by listening to music. Here, we report changes in conscious recovery that we observed. Tottori J. Clin. Res. 12(2), 74-78, 2020

Key words: 遷延性意識障害, 遷延性意識障害度スコア, 音楽鑑賞, 患者への声かけ, 感情表出;
persistent vegetative state, persistent vegetative state score, listening to music, speaking to patients, emotional expression

はじめに

遷延性意識障害とは、重度の意識障害が3ヵ以上に渡って続く状態である。その回復の程度は、最小意識障害、高次脳機能障害、知的障害、発症前と同等の健常者状態など多様であるが、いずれにしても、その回復には外部からの刺激が重要である¹⁾。

B病棟の長期臥床患者は28名で、全体の6割を占めている。そのうち、遷延性意識障害患者は3割である。遷延性意識障害患者に対して現状維持を目的とした介入を行っているが、意識回復のための積極的な看護に至っていない現状がある。昨年度、患者の嗜好に合った刺激を外部から与えることで、感情反応の表出がどの程度向上するのかを明らかにする研究を行った²⁾。その結果、音楽鑑賞が感情表出を引き出す援助として有効であった。しかし、音楽鑑賞中の看護ケアを統一していなかったため、データに信頼性が欠けていた。そこで、今年度は音楽鑑賞とともに看護ケアが実施できるよう関わり方を統一することで、信頼性のある結果が得られるのではないかと考えた。昨年度は一事例のみの関わりであったため、今年度は事例数を増やし、患者の意識回復の変化を検証した。

つまり本研究では、患者の意識回復の変化をより正確に捉えるために、事例数増加と看護ケアの統一をはかり検討分析した。

1. 研究方法

1. 研究対象: A病院 B病棟の遷延性意識障害と診断された患者7名。

2. 研究期間: 2019年の倫理審査承認後から2020年の院外発表まで。

3. 実施場所: A病院 B病棟。

4. データの収集方法

1) データ収集方法

(1)倫理審査委員会承認後、看護研究メンバーが対象家族に、患者の音楽に関する嗜好を聞き取った。

(2)家族より得た情報を踏まえ、対象患者の嗜好に合った音楽を決定した。また、音楽鑑賞中の看護ケアを以下のように統一した。

①毎週水曜日・土曜日の週2回。

②14時～15時の間で30分間程度実施。

③車椅子またはリクライニング車椅子へ移乗し、デイルームに対象者全員を集めた。

④事前に聞き取りを行ったそれぞれの嗜好に合った音楽を順番に流した。

⑤音楽が流れている間に、手浴・足浴・マッサージなど、リズムに合わせた外部刺激を行った。

(3)統一した看護ケア取り組み前・後に、東北療護センター遷延性意識障害度スコア表(江南スコア)の7項目中、感情反応に関する「眼球的動きと認識度」、「発声と意味のある発語」、「簡単な従命と意思疎通」、「表情変化」の4項目を基に、その日の受け持ち看護師が評価した。スコア表の得点は、0点(極く軽度)、5点(軽度)、8 or 7点(中等度)、9点(高度)、10点(重度)で評価・記載した。

(4)対象家族への聞き取り後から9月まで、統一したケアを実施し、観察・記録を行った。

2) データ分析方法

データの得点を介入1週間前、介入中、介入後1週間で比較し、得点差を用いて介入の有効性を研究メンバーが検討した。

5. 倫理的配慮

研究対象である患者・家族に対し、研究の目的・意義、具体的な介入方法、研究の参加・協力は自由であり不参加による不利益は受けない事、いつでも同意は撤回でき、撤回した場合にも不利益は生じない事、個人情報の保護を遵守し得